

佐伯と國水田独歩

賛助会員 山内武 麟

(佐伯市、城下末町)

(序前——引用文は「欺かざるの記」)

二十七日 (注、明治二十六年十一月)

昨日は日曜日、午前、二十六日の日記を書き了りて、教会堂に出席す。左またまコリン夕前番十六章を讀む。一席の感銘を談ふ。女んちら目を醒し堅く信仰に立ち丈夫の如く剛かれの句に就て語る。

午後、収ニと共に土河内村を訪ふ。堅甲陸道の前、左に小路たきり小山の間、小坂を越ゆれば一軒の藜家、山の麓に在り。一個の男、二個の少女、一個の妻、麦撒きの土作り居たり。少年あり同じく此家族の一人なる可し。藜の積み重ねし間より頭差し出して人々の働くを眺め居たり。

夜を渡りて広き野に出づ。農夫野に出づる者多し。麦撒きの忙がしき時ゆへ女等皆男女と共に働き居たり。

山の麓に見ゆる一村は其の谷に迫りて他所と違はず特別に世より離れて一村を作る如く見ゆるが故、遠くより望みて何となく懐しくなりし也。嘗て山の頂より眺めし時、煙立ち昇るを見て已に何となく懐かしかりし也。

村に近くはつれて農夫等野に在るを見たり。犬等を見慣れず、甚だ吠ゆ。

村は村なり。懐かしき村なり。小供等の遊ぶに遊ぶ馬の嘶くと聞きぬ。而も甚だ静かなるを感ず。杜丁産先きに何事か働き居たるを見ぬ。井戸の傍に少女を見たり。水枯れし小川の岸に梅の古木並び立ちぬ。

柿栗屋の如く其間に懸すを見たり。紅葉燃ゆる如く一叢の竹林の間に樹つせ見たり。

此村、吾をして同情を以て人類の住所として親せしめよ。想ふに程々の悲しき、貴き、深き物語は此裡に在らん。生死も此村には見舞ふなり。時代も此村を運ぶなり。恋、恨、怨、義、友愛、義理、皆此村に在るなり。如何なる樂ぞ、此村の若者は夢むなる。如何なる希望ぞ、此村の乙女は夢むなる。深夜此村に集まる天使幾人、悪魔幾人、詩神果して何れの時か此村の家々を青のふぞ。春か秋か、夏か將た冬か、嗚呼此村に生滅せし魂よ今何処に在る。

益々奥深く分け入れば村窮りて只だ溪流のみぞ愈々深く流れ来るなり。流に沿って上る、石に腰掛け足の下に涸ぶ水流を聞き、山谷の幽邃なるを聞き、小鳥の林間に賑するを聞く。かくして自然に近き故。

峠路夕陽野に滿つ。白帆を河流に染まし上流へのびる舟もあり、舟の人よ、御身達が幾時何処ぞ、御身達の物語、語り聞かせかし、此河さの降り下りする人已に幾人、河依然として流れ、人自ら老ふ。されど人情の至妙日老ひざる也。美は亡びざる也。人の永久の生命は老ゆることなし。

昨夜、二階を下りて坂本老人と語る。佐伯に一個の老翁あり。奇怪の者を担ふて行くをしばしば見受けぬ。此老翁の事と問ひ、多少聞き得たり。此翁同様に堪へず何

れの時か遇ふて親しく語り可し。

昨日、船頭河岸にて例の乞食に遇ふ。彼れ噂の如く採して五味捨る場の汚物をさぐり何物か拾ひ出しては口に運ぶ居たり。収ニとて一掃一掃とへしお。

余聞ふ泣き手。答ふ、甘いと其声、只だ其れ味いと云ふ意味の外に情を含めず。声、調子、様子、只だ言ふ甘いと。哀れむ哉、此乞食年十八九歳の由、学

校の生徒より聞きぬ。昨夜又此乞食の事を聞き左だしぬ。自ら言ふ紀州の者なりと、故に此乞食を呼びて紀州と称し誰れも其の親あるやなきやを知らず。已に余程以前より佐伯に在りし。

彼の老翁、此乞食、共に悲しき物語をなすや。吾が「漂」は甚だこれを感じぬ。

前日の二十六日の午後、津志河内を訪れた記である。土河内とあるが、津志河内の誤りである。堅田トンネルの手前から左に山道に入り、小さな坂を越して川原に出ている。坂の下の一軒の農家で、夜まきの島作りに家内総出で働いている。幼ない少年だけ藁こぎの蔭からこの作業を眺めていた。

川原から渡り舟で渡してもらって、向う岸の津志河内に行つた。ここでも農夫達が夜まきの準備に大忙がしてあつた。この津志河内は山の麓に一かたまりになつて他所とは並んでいない。他所より離れて一つの村を作っている。以前、城山の上から眺めた時、白い煙が立ち昇つていたのもこの村で、何となく懐かしく思つていた村である。この村は心から懐かしさを感ずる村である。犬が吠える。遊んでゐる子供等に遇う。馬の嘶きを聞く。しかし村は静かである。庭先で働く若者、井戸傍で水を洗う少女を見た。水枯れた小川の岸辺に梅の枯木があり、掃の葉が星の如くこの間に見え、燃えるような紅葉が一

むらの竹林の中に映えてゐる。

自分は同情の念をもち、この村を人の住む処として見たい。この村の中には深い物語が秘められてゐるであらう。村の人はあらゆる宿命が次々と押し寄せてくるだろう。若者連日どんな樂しみを持っているのか、乙女らどんな希望を持っているか、と色々想像し、詩の心を捉えようとしてゐる。

谷をたよりに奥深く入つて行くと、人家はなく溪流となつて深い谷である。石に膝かけて流れの音を聞き、谷のしじまを感じ、小鳥のさえずりを聞いて、自然に近づいたと感ずる。

帰路は夕陽が野に満ち満ちてゐる。自帆をあげて流氷を登つていく舟がある。この舟人の身の上を案じ、人生を思い、自然の悠久さを感じる。

この津志河内行の記は、小説「小春」に転載されてゐる。「小春」の「三」に「自分が最も熱心にウオーズウオーズを讀んだのは、晝後の佐伯に居た時分である。自分は田舎教師として此所に一年間滞在して居た。

自分は今ウオーズウオーズの詩を讀んで、端なくも思ひ起すは其にこの一年間の生活及び佐伯の風光である。彼地に於て自分は教師といふより、寧ろ生徒であつた。ウオーズウオーズの詩想に導かれて、自然に學ぶことの生徒であつた。と書き出してある。

同書の一四には、「自分は詩集「ウオーズウオーズ」の詩」を其俣にして静かに坂の側を憶ひはじめた。流石に忘れ果てて居ない。彼時の事此時のこと、自分の縁返しを道途の時を憶ふにつけて、其時自分の眼に映り込めた風光は鮮

かに現はれて来る。画々見るよりも鮮明に現はれて来る。秋の空澄々漢つて三里隔つる元越山の半頂から真直に立ち上る一縷の青煙すら、ありくと眼に浮んで来る。

と、下宿した坂本邸の二階から眺めた元越山の風景である。

小説は、こうして独歩が日記へ欺かざるの託しを捨いた、読みを止めていると、そこに小山と云う青年が訪ねて来た。この青年は独歩が佐伯に居た頃と丁度同じ位の年頃であった。

そして二人は郊外へ散歩に出る。独歩は日記を懐裡に出る。野原に出ると青年は独歩のその記を読んで呉れと云うので読んでやる。

十一月三日の記から読み出した。これ日女島に行つて河口近くの石に腰かけて眺めた景色である。次は十一月二十二日の夜の事。即ち船頭町河岸に出たとき、白馬を渡し舟で渡した光景である。

そして次にこの十一月二十六日の、津志河内を訪ねたときの記事である。

また「五」には、山を見て、元越山に登つた時のこと、牡丹山頂の眺望を想い出している。

昨夜へ二十六日夜へは二階から下りて、坂本老人と色々話をした。独歩がここに来て、よく見かける一人の老人がいる。いつか奇怪なものを担つて行く、何か衣札に思つていたので、この老人のことについて聞いた。同情に堪えず、いつか会つて話したいと思う。

この老人は、当時中の谷の避難院の番人としていた爺さんで、毎日所彼場へ大車前におつたのでこの山際道を通つたとの間を往復して来たという。この老人は、小説「源おぢ」の主人公源おぢのモデルだと云われている。

源おぢの後半の性格の描写と借りたのである。

昨日、又紀州に松頭海岸に出会つてゐる。叔二に柿と与えさせて一寸話している。紀州は柿がうまいと答えるだけで、ありがたうと感謝する念は全くなく、大して喜ばもせず、不幸も哀おないのを見て、一層おぢを感ずる。この紀州は小説「源おぢ」の脇役である。坂本老人と紀州の話もした。

この坂本老人の執中の中、今一つの執中があつたのではないかと思う。これは憚つてこの記に書かなかつたのだと考へられる。それは小説「春の鳥」に出る六さんのおとである。独歩の遺稿の中に「憐れなる見」と題する作品がある。それには

「一昨日は月曜なりき。其の夜二階を下りて坂本老人と物語りす」と書き出して、紀州の話をしたあと、坂本老人が語るには

「さて先生お家にも亦一人の愚者あり。己に御存じの如し。其愚かなる事譬へがたなき程なり。如何にすれば宜しきか。殆んど当惑致し居る也。先生別に御工夫もなきまのに候や」と、相談をもちかけられた。独歩も返事に困つたが、この憐れなる見には深く同情した。この子は坂本氏の子でなく、氏の妹の子で、この妹は未亡人となつて、この子とその姉と二人の子供を連れて、坂本家に寄食してゐたのである。

独歩はその子を教育してみましようと思つて、それが手始めに、近所にあつた高等小學校に連れて行つて、石段を上り下りして教えることから始めた。しかし手につけられない愚者である。全く覚えなない。と書いてある。独歩の痲痺録の第四芸術観の中、  
「春の鳥の少年」

と題して

「春の鳥」は余が佐伯当時、事実、ある少年を描けるものなり。現に今も活きて居れりと聞く

その少年と云ふは、金箔付の自痴にて、奈何に落套も、誘導し、教育するも、殆ど教の觀念なし。当時の余は甚しき空想家なりしを以て、慥に教育し得るものと信じて疑ふ所なかりき。秘組織中か或一部に障害ありて、全機能の作用に障害を及ぼすものなるを以て、其れを除き去らば、自然の靈知は閃光の如く湧立つに相違なかる可しと信じて、亦疑ふ所なかりき。故にあらゆる方法を試みて教えつ賺しす。時には此の如くまで、泣くが如き思にて教育せり。然れども遂に教育の効果をみることも能はざりし時は、余と雖も自然を疑

ひてざるを得ざりし也」とある。独歩がこの可憐な少年の爲に、どれほど努力したかを知らされる。

また、独歩の著いた評論の中、予が作品と事実」といふ文章がある。それには「春の鳥」と題して

「此二編の主人公、自痴の少年は、余が豊後佐伯府に在りし時親しく接近した実在人物で、此少年の身の上話は皆な事実である。しかして此少年が城山で悲慘な最後を遂げ、夫事は余の想である。余は此少年を非常な

氣の毒に思ひ、自ら進んで其教育に従事して見た事もある。教の觀念が全く欲けて居るのに如何にもして此

欠陥の縁分なりとも補ひくれんと種々の手段を採つた事もある。けれども此等は悉く徒勞に帰した。そこで余は当時自痴者に就き深い同情と興味を持ち常にこれ

を念頭に置いて居た。……」

「此少年の事を思ふて、人間と鳥獸の差別の生物と宇宙の關係など、随分城山の上で空想に耽つたものであ

る。そして此一編が七八年の後に出来たものである。」と書いてある。この少年に対する独歩の深い同情心から「春の鳥」という名作が生まれたのである。

最後に「『繁』は甚だこれを感じぬ」とある。この繁は独歩自身の仮称で且ないかと思おれる。「繁の半生」「深日記」と題する作品があり、自分自身のことを書いてある。

坂本老人とは、坂本永年氏のことである。

……(つづく)

紹介

國木田独歩の自然探察

佐伯独歩全集 第二巻より (事原的長 岩城 京氏稿)

独歩は佐伯着任のその日から、城山(二回)をほぼ終とし、城山附近を次々と歩き、女馬、津志河原、下堅田、切畑と足を伸ばし、且とんど日曜日には佐伯の山野を歩きつ

て歩いてゐる。そして余當をもちつて次のような遠足登山を試みている。

○天開山 佐伯に来て通關後、十月八日、才寺登り、十一月十八日、山後一泊、翌十九日、鏡峠、赤岳とめぐつて帰る。

○銚子溪谷(三度) 十月二十二日と翌二十七年五月六日。

○元越山(三度) 七月五日と翌年四月二十二日。

○猿戸・前代峠 十二月四日、小説「産婦」の一行にあり、その

○梅屋礼山 三十七年三月四日。

○大八島 二月二十五日。

○切畑・橋原の奥 事神、三月十一日。

○青山 異次、四月一日、東光庵の桜、桜はすでに散り、(刊)